序　文

■ ■ ■

本報告書は2007年12月14日から16日までの 3 日間にわたる名古屋大学文学研究科グローバル COE プログラム「テクスト布置の解釈学的研究と教育」主催の国際シンポジウム「バルザック、フローベール　作品の生成と解釈の問題」における研究発表および議論の要旨を日本語に訳出したものである。なお、フランス語版は外国の出版社からの刊行を予定している。

本シンポジウムは、テクスト布置の解釈学をめぐるプログラムの一環として企画された。「作品の生成」が作品の生産過程への注視を、「解釈の問題」が作品の受容を意味するのが慣例であるとすれば、本シンポジウムの意義の一つは、まずこうした二分法自体を問い直すことにあったことを銘記しておきたい。書く営みが無からの創造ではありえず、すでに書かれたものを場所的現在において読み直し解釈する営みでもあると同時に、解釈もまたたんに書かれたテクストの意味を解読して終わる作業ではなく、解釈者自身の参与が問われてくるような反転を含んだ営みではないのかという問題意識を発条として本シンポジウムは実現されたのである。バルザックとフローベールの多様なコーパス、とりわけテクストの生成過程の物質的痕跡としての草稿などの前テクストや引用の関係をもつ間テクスト、表題などのパラテクスト、批評家や研究者のメタテクストなどを視野に収めながら、テクスト布置の解釈学の可能性を追究した優れた発表と充実した議論がなされた。フランス、アメリカ、カナダから研究の最前線で活躍する研究者を招いてバルザックとフローベールの国際的な研究の蓄積に学びつつ、それと相渉り、テクスト布置の解釈学の立場から少しでも新鮮で切実な問いを投げ返そうとした主催者の意図はほぼ十全に実現されたことになるだろう。

冒頭を飾るのは、エリック・ボルダス「生成論は解釈学か？」であり、シンポジウム全体を貫くテーマをめぐる理論的批評的な考察であり、きわめて鋭利に問題点を摘出している。解釈学の観点からすると、生成論が目指すエクリチュールの意味の復元には、真理としての意味を対象とする解釈学的な操作をつねに伴っている。しかし生成論的詩学の観点からすれば、解明されるべきは、〈いかに〉であって、〈なぜ〉ではないし、意味の働きが問題なのであって、合目的性 finalité は自明ではなくなる。こうして二つの学問的立場は対立し合いかつ相補的でもある。ボルダスは、この相違は最終的に目的性 finalité をめぐる問題に収斂し、信 foi の問題となると結論している。だが、〈いかに〉という問いは果たして〈なぜ〉という問いと切り離すことができるのだろうか。〈いかに〉という問いの設定自体がすでに解釈学の圏域にすでに属しているのではないだろうか。ここでは、ガダマー以降の解釈学は、閉ざされた意味の閉域を越えていく解釈の運動にこそ着目していることをボルダスへの応答として書き留めておきたい。

フィリップ・デュフールは、文学的解釈学が審美的観念の歴史的生成を復元する試みの一例として、民主主義社会の誕生した19世紀における「民主主義的小説と人間的なるものの遭遇」をめぐってきわめて興味深い読解を提示している。トックヴィル、バルザック、フローベールの小説を通して、民主主義社会の生む人間的なものはまさに「同類」として発見され体験されるのだが、そこにはつねに凡庸さというデモクラシーのもたらす否定的側面に批評的視線が注がれることになる。デュフールの発表は、19世紀のフランス文学の動向全般を望遠鏡で望み見ることを可能にしている。

鎌田隆行は、『セザール・ビロトー』の生成過程を辿りながら、一方で作品計画のマクロな展開においてプログラム化、刊行、受容の活動が相互影響的な関係を結び、他方では作品構成の水準で、テクスト化の努力と再読の営みがバルザック本人が戦略的に構築した独自の創作プロセスにしたがって相互に刺激し合うことを具に例証した。バルザックの作品の生成の動的な力が執筆と読解の相互作用性に立脚し、小説テクストの解釈と再解釈の潜在性を徹底的に活用していることは、生成過程が解釈の運動と一体となっていることを示しているだろう。

ステファンヌ・ヴァッションは、生成批評の理論的視座から他の作家の作品制作の様態と比較しつつ、再版のたびに自らの小説を修正し続けたバルザックに対しては、草稿や校正刷りだけでなく全ての版本・新聞等の掲載メディアを生成資料として捉える巨視的なマクロジェネティックが必然的に要請されることを詳述している。この作品生成のダイナミズムは、同時代の歴史的・社会的なコンテクストとの相互作用的な関係から社会生成論によって分析すべきものであり、内的生成（テクスト化）と外的生成（社会化）という二重の相のもとに捉えていくことの重要性が強調されている。

村田京子「バルザック『ラ・ラブイユーズ』のタイトルを巡る考察」は、バルザックがなぜ一旦は放棄したこの題名、余りにもシューの『パリの神秘』のヒロインを喚起してしまうこの題名を再び採用することになったのか、その理由を、善と悪、美と醜との単純な対立を描くシューの作品とむしろ対決する形でバルザックが敢えてこの題名を選んだことを綿密に実証している。題名というパラテクストの分析を通してバルザックの作品世界では現れと存在との隔たりが重要な意味をもつことを解釈にまで踏み込んで示し得たと評せよう。

澤田肇は、言葉によって読者に肖像画や風景画のようなイメージを喚起させる「絵画的構成」について、『谷間の百合』で完成を見たこの手法の原型が、初期の作品『ヴァン＝クロール』に存在することを指摘し、「青年期の作品」と『人間喜劇』の連続性を強調している。バルザックが、潜在的に自らの小説の読者ともなりうる新富裕層と中産階級の絵画愛好家の劇的な増加という現象を意識してこうした詩学を展開したこと、またいかなるジャンルの絵画を想起すべきか読者に示唆している点で美術館学者のさきがけとも言えることを指摘するこの論文は、一つのエステティックが受容のコンテクストの影響を蒙りつつ独自性を獲得していったプロセスを解明している。

ジゼル・セジャンジェールは、『感情教育』の執筆においてフローベールがいかにバルザック『谷間の百合』との類似を意識しながらも、独特の小説美学を実現することによってバルザックとは別の道を歩もうとしたことを明らかにしている。そこでは歴史によって賦活された劇的葛藤によるバルザック的物語から、二人の女性をめぐる恋愛が並列され交替する仕組みへと構成が変貌し、感情が拡散して感覚的なものが現前してくる具体的な世界の描写を通して、歴史の力に抗うもう一つの別の世界の見方、感じ方が顕れてくる。先行者バルザックの批評的解釈を通してフローベール的世界の精神的次元が姿を顕してくる。

エリック・ル＝カルヴェーズの「解釈学に逆らって」と題された発表は、『ボヴァリー夫人』第一部の結末の一文の生成過程を丹念に追いながら、書く営みが目的論に貫かれたプロセスとはほど遠いものであることを例証している。シャルルとの結婚生活に失望したヒロインのエマが結婚式の花束を火に投じて、それが燃え崩れて黒い蝶のようになって飛散していく様の描写において作家が遭遇した様々な問題（描写と焦点化、リズム、繰り返し等々）に光をあて、微に入り細をうがつような細密な分析を施している。作家は試行錯誤を繰り返しながら文を作り上げていくのであって、そこには「なぜ」という解釈学的な問いよりも「いかに」という問いの方がはるかに重要なのだということになろう。しかしカルヴェーズ自身も注意を促しているように、こうした一節に局限したミクロジェネチック自体がよりマクロな生成過程の一部に位置づけられているはずであり、そこにやはり緩やかな目的性が認められるはずである。またこうした作品の一節を取り上げ

ること自体がすでにわれわれ研究者の価値判断を暗黙裡に前提としているのではないだろうか。

フローベールはテーヌ宛の書簡のなかで「黒い蝶」に言及しながら自らの幻覚体験を語っているが、この体験を『ボヴァリー夫人』第三部 8 章でロドルフから金銭的援助を断られた後エマが襲われる幻覚の描写に活用していることは明らかである。沢崎久木の発表は、個人的体験を作品内に持ち込むことを拒んだフローベールが、小説の中にいかにして自分の幻覚体験を利用するに至ったのか、そのプロセスに光をあてようとしたものである。「黒い蝶」は『ボヴァリー夫人』の別のいくつかの箇所の草稿にも書き記されているのだが、最終稿では削除されてしまった。しかし服毒自殺直前の場面では、構想・筋書きの段階から「黒い太陽」が書き込まれている。しかしこの表現は当時のロマン主義的常套句という性格を帯びているがゆえに、最終稿では回避されることになったのではないかと論者は解釈している。しかし「黒い蝶」は『感情教育』第二部 1 章の最後に「蝶」のような「二つの黒い目」として復活を遂げている。沢崎の発表は、草稿執筆の過程において生じた書くことの劇を発掘し、草稿に埋もれた表現の明滅を注視して、その解釈にまで踏み込んでいるきわめて高度な生成研究と解釈との協同的成果と評せよう。

荒原由紀子の「ことばと化石」と題された発表は、『ブヴァールとペキュシェ』の地質学に関する挿話の生成プロセスを対象にしながら、文学的エクリチュールが科学の言説を如何に受容するのかという問題に取り組んでいる。アレクサンドル・ベルトランの啓蒙書『地球の革命のための書簡』や友人ブイエの詩『化石』などが生成過程に関わることを草稿の読解を通して詳細に検討しながら、「韻文のようにリズムをもち、科学の言語のように精密であるような文体」を目指したフローベールが、執筆過程で葛藤を孕んだ二つの要請、すなわち科学の知との合致および文体の彫琢という要請と直面しながらこの挿話を執筆した過程を綿密に明らかにしている。

和田光昌の発表は『ブヴァールとペキュシェ』の三つの章の冒頭に着目して科学論的両義性、すなわち知と物語の遭遇や知の物語化から生じる解釈的両義性をめぐって展開される。第 1 章の冒頭の一文では通りに人気がない説明として「33度の暑さなので」と書かれているが、草稿にはあった「日曜日なので」が削除されてしまった。その結果として「33度の暑さ」は人気のないことの因果論的説明としては不十分となり、したがって「なので comme」は偽りの科学的説明となっている。同様に第 3 章および10章の冒頭にも矛盾を孕んだ、偽りの「折衷主義」が認められる。こうした「科学的な」な意匠を語りの原動力にすることを可能にしている「言語の文法的機能」への信憑が最終的な問題となると結論している。

菅谷憲興「フローベールと民主主義的小説」は19世紀のカトリック系の批評家ポンマルタンが『ボヴァリー夫人』を民主主義的小説と呼んで、善悪、美醜のヒエラルキーに代えて民主主義的平等を導入する没人称の美学を非難したことを取り上げる。この反動的な批評家の批判は、結果的にはむしろフローベールの小説の現代性を、その歴史的社会的次元に光をあてつつ、浮き彫りにすることになっていると結論している。この発表は作品の受容をとおして解釈の問題にアプローチしており、デモクラシーへの着目においてデュフールの発表とも重なってくるだろう。では、こうした善悪、美醜の民主主義的平等は一体何を意味しているのだろうか。フローベールは、民主主義的平等を乗り越え不可能な歴史的地平として受け入れつつ、同時にイロニーによって民主主義的平等に対する暗黙の批評的懐疑の次元を小説に導入することに成功したと解するのが、『「ボヴァリー夫人」を読む――恋愛・金銭・デモクラシー――』（岩波書店、2004年）以来のわたしの持論であることをここに書き添えておきたい。

黒川美和は『純な心』において1793年は一度もなぜか言及されていないという事実に着目して、革命時に「恐ろしいことをした」と見なされているコルミッシュ爺さんの人物造形の生成プロセスを追尋するスリリングな読解を提示している。草稿ではコルミッシュ爺さんは「足焼き賊」であったと記されていたが、フローベールの省略的なエクリチュールの紆余曲折を通してフランス革命の落としている影が改めて浮き彫り

になってくる極めて刺激的な発表となった。最終稿の余白には作家フローベールの存念と意趣が透明に泡立っている。

松澤和宏の発表は、『感情教育』の冒頭部に現れる「Enfin le navire partit」に着目して、とりわけ副詞Enfinが草稿段階では船の出発の遅れに不平を言う乗客の意識（「ようやく」）に関連づけられ、ついでこの乗客の不平が削除された結果、首都パリを離れざるを得ないフレデリックの心残り（「とうとう」）を表現しているものと解釈可能になってくることを明らかにした。最終稿では、一方では当時のブルジョワの蒸気船という技術的進歩のもたらした発明品に対する進歩主義的熱狂に対するイロニー（navireという用語はセーヌ上の蒸気船を指すには大袈裟である）、他方では遺産相続という金銭問題の渦中にありながら、その問題に無頓着な青年の感傷的なナルシシスムに対するイロニーが不透明な光芒を放っている。二重の意味を帯びるこの副詞には二重のイロニーが凝縮されているという解釈を、ナラトロジー的形式主義の限界を踏み越えるものとして提示した。小説冒頭の一文の意味がそれを取り巻く文脈との関連で、さらに小説全体との関連で再解釈され、再解釈された部分が反対に生成途上にある小説全体の意味を逆照射するという解釈学的循環が執筆のプロセスにおいても、そしてそれを読み解く生成論的解釈の営みにおいても現働化している。

同時代人たろうとしたバルザックと同時代人たりえぬことから出発したフローベール、二人の文学はいかに究めても果てのない興味津々の主題である。三日間にわたる活発な意見交換を促したものは、おそらく二人の作家の文学世界への愛とでも呼ぶほかないものであろう。そしておそらく愛というものがつねにそうであるように、文学への愛も様々な偏向や先入主を含んでいる。しかし意見の相違を越えて問題の共有を可能にし、対話を通してみずからの先入主の吟味検討へ導いてくれるものもまた同じ文学への愛なのではないだろうか。その意味で今回の国際シンポジウムの実現自体がすぐれて解釈学的な実践であった、と言えば、手前味噌になるだろうか。シンポジウムの語源的意味が「一緒に飲む人」であったことを想起して、符節を合わす思いがしたことを最後に書き添えておきたい。

本シンポジウムの組織および本報告書の刊行のためにこの間協力を惜しまなかった鎌田隆行講師、クレール・フォヴェルグ外国人教師、永田道弘研究員の三人にはとくにこの場を借りて深謝したい。またフランス文学研究室の大学院生と学部生の全面的な協力を心からありがたく、また嬉しく思う。最後に名古屋大学へ足を運んでくださったすべての出席者と優れた研究成果をもたらしてくれた発表者に対しても感謝したい。なお日本フランス語フランス文学会中部支部からは資金面での賛助をいただいたことを記して感謝したい。

2008年2月26日

グローバルCOEプログラム「テクスト布置の解釈学的研究と教育」研究担当サブリーダー
名古屋大学大学院文学研究科教授　松 澤 和 宏